

ノンフィクション書籍：「カニは横に歩く」を読んで

就職したその年（'67年8月）に重症児施設は児童福祉施設に追加されたが、世間的にはまだ「この子たちを生かして何になるの？」という見方が多かった。

それだけに、当時（'70年代始め）、障害児の墮胎を容易にする優生保護法改正の動きに毅然と反旗を掲げた脳性マヒの青年たちのグループ「青い芝」を知り、初代会長の著書「母よ！殺すな」、第二代会長の著書「炎群～障害者殺しの思想～」を読んだものであった。

先日、新聞の書籍広告で半世紀の「青い芝」運動の経過を追ったノンフィクションの書「カニは横に歩く～自立障害者たちの半世紀～」の出版を知り、青年たちのその後の生き様も知りたく早速購読した。

著者は、学生時代には介護者として、大卒後も地方新聞者の記者兼介護者として、現在もノンフィクション作家兼介護者として、「兵庫青い芝」に27年の長きにわたり係わり続けている。

彼らは運動方針は自分たちが決めることであり、「健全者」である「介護者は自分たちの手足となるだけでいい」と、運動に口を挟むことを拒否するところから、彼ら自身の「自主性」、「主体性」を強烈に主張した。

当時、自分たちを差別、疎外する「健全者」社会をぶち壊すべく、車いす拒否の公共バスジャック事件、差別する施設や行政への糾弾・占拠・籠城事件等と、果敢・過激に障害のある「あるがままの生」を放り込むという強烈な自己主張の運動を展開した。

だが、当時は障害者は哀れむべき存在としてしか見られておらず、こうした事件を起こし警察に排除されても逮捕されることなく、社会の法的常識からも無視される現実には彼ら自身が啞然とし、更に自己存在の主張を強烈にせざるをえない社会状況であった。

長きに渡り側で係わり続ける著者だからか、メンバーやその介護者の赤裸々な生き様、運動の内部からの詳細な経過、また、その時々々の文書等の資料、更に今の彼らも取材し、お互いに「あるがままの生をどう考えるか」という遠大なテーマに取り組むノンフィクション作家の客観的な視点からの本書であった。

本書のタイトル「カニは横に歩く」は、「兵庫青い芝」のメンバーが被写体となり'73年に制作されたドキュメンタリー映画のタイトルで、「カニって横に歩いてるやん。誰も不思議に思わへんやん。障害者が健常者と違う歩き方をしているのは当たり前のことちゃうの。」からとか。